

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別致承認雑誌第六二七号  
平成二十二年十二月一日発行(第四百十三卷第十二号)

# ホトトギス

十二月号



## 俳句随想 〔三百四十二〕

汀子

気になる漢字の間違い、それが許容範囲となつて歳時記と称するものに載っていることを知つた。正しく継承していくのは難しいかも知れないが、俳句の季題として少なくともホトトギス歳時記では間違いないものにした。例えば「心太」という季題である。「心天」と書きたくなるかも知れないが少なくともホトトギスでは容認していない。ある歳時記に載っていることも知つた。しかしそれは間違つた人が居てそのままになつて残つて行つたに違いない。私の持つている辞書の全てを調べたがどれにも「心太」とあり「心天」はないのである。詠み方も然り。紫陽花を「しようか」と読むことで詩情が削がれる。やはり「あじさい」と読みたい。言葉は生きている。また文法を盾に取つて俳句に執拗な抗議を繰り返す人がいる。「始めに言葉があつて文法は後から出来たのである」音便にしてもそうである。間違いと決めつけてはならない。読むのに便宜上音便が出来たと私は理解している。他の歳時記に文句はつけない。

ホトトギスで勉強する方々は「虚子編『新歳時記』」「ホトトギス『新歳時記』」を参考にして頂きたい。

# 句日記 汀子

平成二十一年十二月一日 有恒俳句会

名苑の要要の冬紅葉  
暁の星仰ぎたるより冬の晴  
遠会釈又遠会釈冬紅葉  
苑歩き来て暖房に拾はるる  
早々と忘年会でありしかな  
俳号の由来も聞きぬ年忘

十二月一日 無名会

短日の実感といふ歩幅かな  
焼諸の一口づつののどごしに  
冬紅葉日の中心の移りけり  
早々と決まりし一日年忘  
きざはしは冬の星空へと向かふ  
コート脱ぐより会場に紛れ込む  
下書きの未完の弔辞寒かりし  
十二月一日 日本伝統俳句協会忘年会  
弔辞書き終へて短日昏れてをり  
亡き人を偲ぶ心の小六月  
十二月六日 関西野分会  
冬晴に加勢を受けし会となる  
弔辞書き終へて寒夜の旅支度

鴨飛んで紛るる果のなき空に  
十二月六日 下萌句会  
短日や三つの会の濟めば夜に  
悲しみを伝へて息の白きこと  
短日の中途半端といふ仕事

十二月七日 ロイヤル俳壇

掃く落葉掃かぬ落葉も庭のもの  
実感としての師走はまだ先に  
雨漏りの工事はじまる寒さかな  
家居していつか忘れてゐし寒さ  
十二月八日 大阪倶楽部  
十二月八日と気づく朝かな  
息白く告げねばならぬことあり  
霜月の過ぎゆく迅さ家居にも  
短日の工事の音の昏れそめし  
損せしや得をせしやと日短  
冬木より冬木へ移る日向かな  
短日の暮れてまだまだ時間あり

十二月八日 綿業倶楽部

十二月八日 綿業倶楽部  
冬霞脱ぎしばかりの富士俯瞰  
艶と見し舞台顔見世ならばこそ  
顔見世を出てそぞろゆく京の風  
演目の気に入つてゐし顔見世に  
冬霞より抜け出せぬ山路かな  
十二月十日 清交社  
休憩は殆ど無しと牡蠣割女

くり返す牡蠣割る手順見て通る  
著ぶくれてゐし安心を纏ひけり  
暁の星見る著ぶくれてありしかな  
十二月十一日 工業倶楽部

著ぶくれを厭うてをれずなりにけり  
粕汁と聞きて帰宅の早まりし  
傘とられたるは北風なりしこと  
北風に出そびれてゐし朝かな  
著ぶくれて行くに憚る出先かな  
粕汁の熱々を吹きくつろげる  
十二月十六日 夏潮句会

焚火するつもりばかりに終りけり  
マロニエの冬芽に托す期待あり  
夜空見に星のきざはし通ふ冬  
星とんで冬の星座をよぎりけり  
冬の蓄薇五十本客三十人  
足場まだ残されてゐし師走かな  
十二月十八日 時雨句会

ひそめたる命吉野の枯葎  
ストーブを先づは点して家居かな  
似合はないことを承知の冬帽子  
冬帽子より現はれて来たりけり  
ストーブの薪の火色の更けにけり  
雪山の富士の怖さはあなどれず  
十二月二十日 野分会  
冬の雲動かぬ如く動きをり

# 廣太郎句帳

廣太郎

千両か十両かいや二十両  
若菜はんもうみちのくは雪でつか

十二月五日 日本伝統俳句協会東京・神奈川合同部会

焼諸屋声に落着く人都会  
暮早し赤提灯に人吸はれ

十二月十七日 登高会

銀杏散る天の余白を広げつつ  
高僧も歳末たすけあひ運動  
冬帝の息吐く如く雲広げ

十二月七日 はせを句会

鯛起し聞きて大漁節も聴き  
方言も飛び出す年の市活気  
寒鯛を捌く腕の黒々と  
鯛起し能登に句碑建つ謀

丸ビルに灯らぬ窓や暮早し

十二月十日 土筆会

柚子風呂に九九を覚えし頃のこと

十二月十九日 「俳句生活」出句

冬桜らしく名苑彩れり  
鴨浮寝してゐるふりをしてるだけ

十二月十一日 六甲会

一の宮芭蕉を友に月今宵  
初水割りたき指が伸びてくる

十二月二十日 若水句会

平成二十一年十一月一日 カトリック新聞速者吟  
北窓を塞ぎ待降節の朝

十二月一日 一水会

肝食うて河豚に中りし女かな  
どうしても寒く言はねばならぬこと  
枯尾花従へ富嶽凜とあり

十二月三日 蕉心会

冬の鳥黙らせてゐる雨しとど

十二月十日 虚子記念文学館投句

牡蠣船といふ百人の宴かな

街はもうポインセチアが少し染め

館師走十周年を指呼にして

彦様は業平似とや都鳥

十二月十四日 朝日カルチャー若草句会

これ以上祝日いらぬ十二月  
牡蠣船のもう動くことなき騒ぎ

八分の六ほどの幸冬木立  
もうクリスマスツリーを飾りますか

木兎の右目が捉へたる獲物  
香の先に来て花枇杷と判るまで

冬の雨漏れくる辺り喫煙所

十二月十五日 草木瓜会

赤ばかり街に溢れて十二月

山茶花の三片ほどに騒ぐ水

おいもおいもいしやあきいもやあきたて

因縁を語る司祭やクリスマス

十二月二十五日 カトリック新聞速者吟

# 雑詠

## 廣太郎 選

桜葉降り敷く墓に眠りけり 横浜 小川みゆき  
 夕暮や茅花流しの地平線 同  
 野に山に春一番が運ぶもの 同  
 満ち潮の磯に碎けて夜光虫 八尾 山下美典  
 監視員 緊張 土用浪の浜 同  
 見るからに苦瓜といふ肌をして 同  
 子育ての楽しき頃のキャンプかな 神戸 藤井啓子  
 文庫本顔に伏せたるハンモック 同  
 何もせぬことが避暑地の過し方 同  
 父の日の米寿の吾に未来あり 福山 竹下陶子  
 螢火のただよひ山の動き出す 同  
 星涼し我らたちまち宇宙人 同  
 一茎に黄菅の昨日 今日 明日 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 ふり向けば夕菅の野となつてをり 同  
 夕菅の今宵を消して山の雨 同  
 御機嫌は斜めを向いて百合の花 神戸 山田佳乃  
 露の中に一人と思ふ夜 同  
 疲鶉の濡れ色に又雨の降る 同

向日葵の正面作るために咲く 香川 湯川 雅  
 桔梗の蕾 明日 用 明 後 日 用 同  
 己が空扇ぎて乱し芭蕉林 同  
 三伏や獣舎の声の鎮もりぬ 奈良 古賀しぐれ  
 河馬といふ体重沈め夏の水 同  
 海上都市 空中都市に 夏霞 同  
 吾は野に野は涼風に抱かるる 袋井 湖東 紀子  
 一日が終つてゆきぬ黄菅かな 同  
 鯛のめくつてゆきし野のページ 同  
 木々の葉の色を仕上げて晩夏かな 東京 橋本くに彦  
 名苑の水も錆びびる晩夏かな 同  
 釣堀に水の疲れのありにけり 同  
 小諸より訪ね来られし汗の客 京都 安原 葉  
 蜘蛛は罟を張れず虚子館庭手入 同  
 ナイターといふ連立ちてゆくとこ 同  
 黒南風や鴉は叫び 鷗 舞 び 東京 大久保白村  
 鰻を釣る島の銀行支店長 同  
 はるばると来てしげしげと蟻地獄 同  
 海風に山風も来て夏座敷 熱海 嶋田 一步  
 一人ゐることの広さや夏座敷 同  
 夏座敷のこして富士を見に庭に 同  
 進めずにゐる夕菅に耳澄まし 柏 同  
 榛名富士仰ぎ夕立雲を読む 同  
 姿変へまた炎帝の現はるる 同 田丸 千種

# 雑詠句評（十一月号より）

むつみ・葉　・　中正  
とほ歩・千鶴子・保　佳  
憲明・芳　子・静　龍  
美　奇・眞理子・廣太郎

## 木の実踏み潰しバックをして駐車　大阪　林　直入

この句を拝見した時に、景色もさることながら、ブレーキの音と踏み潰された木の実の弾ける音がとつさに耳許で聞こえ、作者が経験したその時の感触まで伝わる。初めは何を踏んだのだろうと心配したに違いないが、木の実と分かった時の安堵の様子まで見え臨場感のある句である。木の実雨、木の実時雨など落ちる木の実はよく詠むが、「踏み潰し」た木の実の一瞬の出来事を身体でキャッチした句は生き生きと新鮮であり歯切れがいい。実際の生活の中の一齣も季題の「木の実」だからこそ詩になり、季題の存在感を再認識させられた句である。（むつみ）

よく「木の実踏む」という遣い方をされる季題であるが、一般的には歩いていて踏んでその風情があるのだが、この句は最初「木の実踏み」までは一般的な句として鑑賞すると、その後後に「潰しバックをして駐車」と、どんでん返しも甚だしい。何とも諧謔味溢れた楽しい句である。（廣太郎）

## 納骨の間の梅雨晴でありしかな　宝塚　水田むつみ

作者のご母堂桑田永子様は、平成二十二年四月十日に入院され、五月十日に九十一歳のご生涯を閉じられたという。ここにあらためて在りし日のお姿をお偲びし、謹んで哀悼の意を表します。

この句は、そのご納骨の折の情景かと思われる。その日は朝から梅雨が降っていたが、不思議なことに納骨の間だけ梅雨晴となったという。偶の梅雨晴であったとしても何か、遺されたものたちのことを憶う母上のやさしかったその心向けのようにも思われて、あらためて悼み偲んでいる心持が読む側にもよく伝わってくる。簡潔平明に叙されていて余韻の深い句である。（葉）

恐らく、というより間違いなく御母堂桑田永子様のご納骨の日であろう。季節は梅雨であるにもかかわらず、丁度墓地で納骨の儀式が行なわれている間だけ太陽が覗いたのである。偶然とは思えない天の恵みに、参列者一同の喪心が窺える。御母堂様への限りない愛も感じる事が出来る。（廣太郎）（以下略）

# 天地有情

どうしてもできぬ俳句の暑苦し  
 さりげなく友逝くことも秋立ちぬ  
 花莫蔭といふもてなしに寛ぎぬ  
 花莫蔭にけふの疲れを癒されよ  
 燕の子明日は飛翔といふ構へ  
 五月闇抜け真つ新な朝かな  
 ホテルてふ都会の森の蝉時雨  
 避暑ホテル玻璃戸一枚づつが森  
 汀子月旦新涼の風が吹く  
 盆の月少し濁りて情あり  
 壬生の面見て京劇の面を見て  
 纏足の靴涼しとも哀しとも  
 小城下の午は閑けき栗の花  
 初蟬を風が運んで厨口  
 鶯に老残の生ありやなし  
 思ひ出の肥後は火の国火蛾の国  
 街路樹のマンゴー南十字星  
 花莫蔭や荘の主は里見淳

豊中 瀧 青佳  
 同  
 京都 安原 葉  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 奈良 古賀しぐれ  
 同  
 榎原 稲岡 長  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 たつの 浅井青陽子  
 同  
 徳島 上崎暮潮  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同

とび来たとび去る蛍火の中に  
 とぶ蛍速しと思ふ試歩の吾に  
 月見草帰れば母が居るやうな  
 鉢植糸のきうり初挽ぎ胡瓜もみ  
 新しき朝のために木槿散る  
 娘の抱く二つの祖国いわし雲  
 水音の生き生きとあり木下闇  
 空蟬の縋りし風のジャカランダ  
 終戦の日は空を見て海を見て  
 終戦の日とは瓦礫の記憶のみ  
 囷鮎ますぐに水面引かれくる  
 吹く風にひと揺らぎせし蛇の衣  
 高原に泊つ虫の数星の数  
 高原や芒の風を追ふ下山  
 鈴蘭の実となり侍る年尾句碑  
 天帝のまばゆき光梅雨明けし  
 矢のやうな雨が降るなり鳩浮巢  
 梅雨滂沱胸に手当てて寝落ちけり

熱海 嶋田 一步  
 同  
 同 嶋田摩耶子  
 同  
 神戸 長山あや  
 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同  
 明石 中杉隆世  
 同  
 高知 橋田憲明  
 同  
 金沢 藤浦昭代  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同

# 汀子選

# 天地有情句評

## 汀子

避暑ホテル玻璃戸一枚づつが森 奈良 古賀しぐれ  
森の情景を取り込んだホテル。表現の妙。

汀子 月旦新涼の風が吹く 榎原 稲岡 長

「ホトトギス101」の人物評（月旦）の役目。

どうしてもできぬ俳句の暑苦し 豊中 瀧 青佳

纏足の靴涼しとも哀しとも 神戸 後藤比奈夫

より高きを目指す努力に障害となる暑苦しさ。

昔の纏足の靴に感慨を抱く作者。

花莫塵といふもてなしに寛ぎぬ 京都 安原 葉

小城下の午は閑けき栗の花 たつの 浅井青陽子

古き良き時代を継承する主客。

匂いの強烈な栗の花とて閑かな城下町。

五月闇抜け真つ新たな朝かな 東京 稲畑廣太郎

思ひ出の肥後は火の国火蛾の国 徳島 上崎暮潮

梅雨晴れの朝を真つ新と見た感性。

肥後熊本を思い出す作者の郷愁。（以下略）